釋椋

稻葉岩吉著

昭和十一年十一月一日、大阪屋號書店發行
四六倍版一二六頁、附錄主要論文及び著書目錄一五頁、圖版十五葉、定價五圓

我が國滿鮮史研究の大先達であり、獨自の歷史體系を以て東洋史學界に地歩を占めて居られる君山稻葉博士は此度目出度く還曆を迎へられ、その記念を自祝されて「釋椋」一卷を世に頒たれた。われわれは博士の尙かくしやくたる健在を祝福すると同時に、早老の慣しのある學界によくこの巨篇をものされて後進を啓蒙される博士の學的精進の眞摯さに深く尊敬の意を拂ふものである。

「釋椋」は次の四つの論文から成立つて居る。卽ち「百濟の椋及椋部」「校倉の後を探ねて」「長生標及長生庫」「長生標及長生庫補考」とあるのがそれである。簽題は最初の論文に由來した樣に思はれるが、著者自ら企圖する所を解說され、「釋椋は上代日本の經濟機構たりしクラ（藏・倉）の由來を究明せんとした試みであつて、この機構は、遠く高勾麗の桴京と稱するクラより發展し、やがて百濟の椋部となり、遂に日本の椋（クラ）として顯現したものと考へるのがこの要旨である」と述べられて居る。されば釋椋一篇には博士の圓熟されたる見識と學殖の豐かさが遺憾なく示めされて居り、支那・朝鮮・日本の史料が縱橫に驅使され、その文獻の上から又言語の上からの該博な考證振りは讀者をして絢爛目を瞠たゝせるものがある。

今釋椋を簡單に紹介すると、通行本北史百濟傳の內の職官の事を述べた所に「內掠部外掠部」の一句が見えて居る。この掠の字はちよつと解釋がつかぬが、之を我が國傳來の舊鈔本翰苑によつて見ると、同書には括地志が引かれて居て、右の不審の箇所は「椋部」に作られてあり、又三國史記には「內原部外原部」に作られて居る。今、椋及原の字を考へると、原には倉の意がある事は略々分るが、椋字の原義には倉の意はない。然るに我が新撰姓氏錄等によると椋をクラと訓まして居る。そして椋が我國の造字と考へられないからクラの訓と原及椋の字とを關係づけて考察せねばならぬ。今我が國上古に於ける日鮮交涉史を想起すると、

百濟より王仁一派の來朝と彼の國の文物制度の將來といふ史實に氣づく。王仁の名によつて代表される百濟人は必ずやその先進國の立場から吾が朝廷に入つて、行政制度機構の整備に參劃したであらうと思はれる。特にクラの制度の整備は當時の社會經濟上の要求に基いてなされた主なるものの一であらうが、この要望を充たす爲に百濟人は母國の制に模してその體裁を整へた事が想像される。彼等の子孫がクラビトとしてその姓を傳へて居る所に重大な意義が存するのであり、クラビトの名稱は實にクラの制度と共に百濟より齎されたものと博士は說かれる。

然して博士は支那朝鮮の文獻から、或は土俗言語上から北方系民族の間には、クラの近似音の下に倉の意の存する事を、又文事を司る職のものからヒトの訓の出る事を證されて、クラヒトが外來語なる事を確められ、更にクラの沿革を尋ねて魏志東夷傳高勾麗の條に見える桴京の字を得られた。桴京は高勾麗の造語であつて漢語の京卽倉より出た疊言疊語と考へられる。卽ち高勾麗は漢人との接觸によつてクラの樣式を學び、それが桴京と呼ばれ同系の言語文化を傳へた百濟に入つては內外椋部となり、やがてその制は我國に舶載され、クラベ・クラヒトの名稱となつたのである。同時にこの事には文化東漸の跡が見出されると說かれる。私は今これ等の考證を批判する餘裕を持たないけれども、クラヒトの解釋に於ける言語上の手續きや、魏志の高勾麗に關する記事の解釋には博士の說を肯定するに躊躇するものがある。然しこれ等の事も實は博士の意圖されて居る根本的な考へ方には大した影響もないので、卽ち博士は我が國上古の文化の性質を檢討される途上、たま〳〵クラの機構に就いて分析を進められた結果それが我が國獨自の形式のものでなく却つてその整備した點は當時の外國である百濟人の手に俟つ所多く、然も百濟人のそれもやがて漢土の文化に淵源する所を强調されたのである。博士は平素「著者は鮮滿と日本との文化交流を探求することは、われらにつよく約束つけられてゐる云々」との信念を抱持されて居るが、この一篇は如上の見解の具體化されたものである。然してこゝに異種の文化の理解の仕方や享受の過程の問題が存する。その事に關して博士はこの篇の結言に「クラは適應性(當時の社會への)をもつところの

輸入機構であり、そこに發達の可能性を示したものである。かつてわたくしは樂浪文化はあまりに高級品であつて、四周民族に受け入れられるところ少なかつたと述べ、又その受け入れられたものは、低級な政治機構卽ち掾曹が最も强力であらうと述べた……日本のクラは支那の庫藏機構が半島を經由し、地方色の附加せられたるによりて、完全發達したものであり、必しもわが社會的攝取力に與つたものではない」と述べられて居る。蓋しこの一篇の壓卷ともいふべき所である。

かくて讀者は東方諸國の文化の系統を探る事によつて、文化の享受の仕方や理解の能力は結局其の國の性格敎養の高低に應じるもので、その間に餘計なものが入る餘地のないといふ平凡な事實に氣がつくであらうし、更に文化の意味とか價値の問題が考慮されねばならぬといふ事も考へる樣になる。

然して文化交流を說かれる博士の態度に就いては一言すればそこに一貫して博士の年代の人々に共通な經世家的な立場が窺はれる。博士は此立場から歷史に價値を認められ、その効用性を理解された。而してこの立場の不動性と時代に對する秀れたる洞察力の故に博士の歷史體系には眞實性が見られ又優れたる歷史家としての見識が存すると考へられる。

次に「校倉を探ねて」は上述のクラの形態は校倉アゼクラ式建造であらうと推定され、現在半島及びその附近の地方に殘存して居るこの種の遺物を探ねられて釋椋の見解を實證されたものである。

「長生標及長生庫」の二篇は高麗時代の寺院經濟機構たりし長生庫(無盡藏)の由來と變遷を考察されたものであるが、この二篇は曾つて東亞經濟研究に載せられたものであり、又紙數の都合上詳細なる紹介を割愛しやうと思ふ。

妄言を連ねた事を深く博士にお詫びし、併せて博士の御加餐を祈つて止まぬものである。　(三田村)